

2010年

## ウィーン市フロリズドルフ区青少年ホームステイ派遣報告

ヨーロッパの中央に位置するオーストリアの首都ウィーン市。ウィーン市の第21区であるフロリズドルフ区は、旧市街とはドナウ川の対岸に位置します。面積は約44平方キロと葛飾区よりやや広く、およそ14万人が暮らすウィーン市で2番目に人口の多い区です。

葛飾区は1987年11月に、この音楽の都、華やかな宮廷文化と歴史の町ウィーン市のフロリズドルフ区と友好都市締結し、それ以来、さまざまな交流を行っています。

なかでも、夏休み期間中の2週間の青少年交換ホームステイ交流は、イメージとしてのオーストリアを「自分が知るウィーン」に変えてくれます。

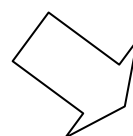
青少年交流は隔年で派遣と受入を行っており、派遣の年である今年(2010年)は、7月26日から8月9日までの15日間、5名の青少年が葛飾からウィーンを訪ねました。5人は温かい歓迎を受け、時にはカルチャーショックを受けながら、文化や習慣の違いを柔軟に吸収し、日本を見直したり、日本を知ってもらうために努力したりする様子が、帰国後の報告会でのいきいきした話しぶりから伝わってきました。ここでご紹介するのは、5人の派遣団員がそれぞれに過ごしたウィーンでの感想と報告です。それぞれが見たこと、感じたことを報告書としてそのまま掲載しました。

参加した派遣団員の国際交流は始まったばかりです。これから、地域や学校、職場でこの経験を活かして活躍していかれることを期待しています！

## 青少年ホームステイ派遣日程

日付	行 事
2010/7/26	<b>15:55</b> ウィーン到着 続いて ドナウタワーにて軽食
2010/7/27	<b>11:00</b> スペイン乗馬学を見学 (リピツァーナー種の種馬がピーバーからウィーンを訪問中) <b>12:30</b> 市庁舎にて軽食 続いて 市庁舎 市議会第3議長 ハイイツ・フーフナグル氏を表敬 続いて 市庁舎ガイドツアー
2010/7/28	ホームステイ
2010/7/29	ホームステイ
2010/7/30	<b>20:15</b> 楽友協会 ゴールドナー・ザールにて当時の衣装を着た演奏者によるモーツアルトのコンサートを鑑賞
2010/7/31	ホームステイ
2010/8/1	ホームステイ
2010/8/2	<b>10:00</b> レーナー区長を区庁舎に表敬訪問 続いて 寅さん公園、シュリンガー・マルクトの花壇にある紋章、かつしかシュトラ ーセ(葛飾通り)を散策 <b>13:00</b> ホテル・ザッハーにてザッハートルテを賞味 <b>14:00</b> フィアカー(馬車)でウィーン市内見学 続いてシシー博物館見学
2010/8/3	<b>7:20</b> ザルツブルク日帰り観光
2010/8/4	ホームステイ
2010/8/5	ホームステイ
2010/8/6	<b>18:00</b> お別れ会 フロリズドルフ区内のホイリゲ、フリツチュ・ヴァンデラーにて
2010/8/7	ホームステイ
2010/8/8	<b>13:55</b> ウィーン出発
2010/8/9	<b>8:05</b> 成田空港着

## オーストリア共和国 首都ウィーン (VIENNA)



首都ウィーンの  
第21区が  
フロリズドルフ区です！

### 21 Floridsdorf



## 感謝・感激・ホームステイ

小林 セイラ 愛実



昔王族が住んでいた大きなお城、高い塔をもつ教会、ホグワーツのような市庁舎、大きな噴水や石像、赤い屋根の可愛い家並み、町中にある古い建物や町の所々にある石畳、その上を走るフィアカー。

ウィーンの町は、それは美しく、まるで町中が1つの美術館のようでした。

ステイ中、市庁舎やホーフブルク、シェーンブルン宮殿などの名所を観光したり、モーツァルトコンサートやスペイン乗馬学校の鑑賞をしたり、また、オーストリアの歴史や国風も学ぶ事ができて、とても有意義な時間を過ごす事ができました。

しかし、それにも増して最高に楽しく、幸せだったのはホストファミリーと過ごせたということでした。このステイを通して私には、オーストリアのパパ、ママ、1つ上の姉、1つ下の妹、11才の弟、5歳の妹ができ、大家族の仲間入りを果たしました。家族はみんなフレンドリーで面白く、すぐ打ち解ける事ができました。特に1つ上の Sarah とは何時でも一緒にいて学校、友達、恋愛、ファッション、文化、色々な事について話しました。他の国の同年代の子の意見や考えを聞くのは面白かったです。また、名前が2人とも Sarah だったので家族によく



▲左から Sarah、私、ママ

“Which Sarah?” と聞いたり、

“The other Sarah” と言われたりするのとは可笑しかったです。始めはお互い気を遣う事もありましたが、そのうち自然体で接するようになり、今では大好きなお姉ちゃんであり親友です。他のみんなも本当に大好きで別れるのは辛かったです。

また、家族内では英語、ドイツ語そして日本語が使われました。英語は勿論のこと、ドイツ語は家族の会話をきいたり、また下の2人が英語をほとんど話せなかったりした事もあり、ほんの少しですがなんとか話せるようになりました。日本語はというと「おはよう」や「おやすみ」、「いただきます」などの言葉を家族のみんなが一生懸命使ってくれました。ほんの2、3語とはいえ自分の母国語を使ってもらえてとても嬉しかったです。



このステイを通してわたしが得たものは計り知れません。なんといっても、その国の家族と寝食を共にし、文化の違いや特徴そしてその国の考え方を肌で感じる事ができたのです。将来、国際的な仕事に就きたいので良い経験になるだろうと思って応募した企画ですが、それ

以上に私自身の人間性も磨く事ができました。そしてこの企画を通して得た出会いは私にとって掛け替えのないものとなり、これからもずっと大切にしていきたいです。

この企画に携わっていただいた方々には深く感謝し、これからも葛飾区とフロリズドルフ区の交流に少しでも貢献できるよう努力していきたいです。

## ウィーンホームステイ記録

坂本 優莉

ドイツ語を学習してみたいと思っていたところ、このホームステイの募集が載っている広報紙を見つけました。両親と海外旅行に行ったことはありましたが、一つの都市に2週間も滞在することや、その国の人々と生活を共にできるということは夢のようでした。幸運にも参加できることが決まってから、学校行事の合間をぬっての事前学習会への参加でウィーンについて学ぶ機会をいただきました。また、自分でも興味が沸いてきてガイドブックを読みました。ガイドブックのどこにどの写真や説明があるかわかるようになった頃には、訪問してみたい場所、食べてみたい料理、体験したいことがどんどん増えてしまいました。

ホストファミリーが決定した後、すぐにホストマザーからメールを受け取り、家族の紹介や家の周りの様子を教えていただきました。また、行きたい場所、嫌いな食べ物、不安なことなどあったらなんでも遠慮なく言うようにとの言葉にとっても安心しました。出発日が迫り祖父母は心配していましたが、暖かさで一杯のメールと自分なりのウィーンへのイメージや行ってみたい場所リストで頭は一杯になり不安を感じることはありませんでした。あっという間に学校の定期テストを乗り越え、成田出発の日を迎えたのでした。そして、ガイドブッ



クで得たウィーンへのあこがれとは比べものにならないほどの感動の2週間を送りました。

音楽の都ウィーンにあるスペイン乗馬学校を公式行事で訪れたことがまず最初の感動でした。実は私は馬が大好きであこがれていたのです。リピツァ種の美しい馬たちが室内のそれも間近で走る姿を見ることができたのは予想外でした。私は1日目からビデオカメラが電池切れになるまで撮り続けてしまいました。是非、あの馬たちの祖先がいるピーバーを訪ねてみたいと思いました。

そして次に、クリスマスシーズンの旅行パンフレットにもよく登場するウィーン市庁舎を訪問しました。外観の美しさとともに、案内していただいた内部の歴史ある重厚な雰囲気にも圧倒されました。私はまだ世界史でヨーロッパ史を学んでいないので勉強不足でしたが、これから学習する上でとても興味が湧いてきました。

楽友協会のコンサートも楽しみにしていたもののひとつでした。トルコ行進曲の演奏の時、モーツァルト時代の衣装を身にまとった指揮者が振り向いて手拍子を求めたことには驚きました。音楽はやはり楽しむものなのだと思います。

ホイリゲでのお別れ会では、日本出発日前日に帯結びの特訓を受けたゆかたを着て、書道をしました。あらかじめホストの皆さんの名前に漢字を充てたお手本を作っておき、それを下に敷いて書いてもらうことにしました。書き始めたとき、ゆかたの袖が気になったのと、みなさんの手元を見つめる視線に思わず手が震えてしまいました。一生懸命に書いてくださったホストのみなさんの真剣な眼差しが忘れられません。とてもよい経験をさせていただきました。

さて、私のお世話になったホストファミリーは、数学と物理の先生をしていらっしゃるホストマザーとリタイヤされたご主人、2人のホストシスター、1人のホストブラザーのいるご家庭でした。ホストマザーとシスターは日本にホームステイの経験もあり、また以前にも日本からのホームステイを受けてくださったこともあるとのことでした。



公式行事のない日も、前もって私に行きたい所を尋ね、計画を立て毎日いろいろな場所に連れて行ってくださいました。長袖シャツ3枚を重ね着してもまだ寒かった花崗岩でできた洞窟SEGROTT。ジャケットをお借りして向かったスロバキアのブラチスラバ。気温差だけを考えても猛暑の日本と比べるとぜいたくをさせていただきました。スロバキアはチェコスロバキアという国が分裂したということしか知りませんでしたが、言語はチェコ語で、土産物屋さんでもドイツ語は通じないという体験をしました。手作りの工芸品は素朴でとてもかわいらしいものがありました。

たくさんの観光の合間には、ウィーン伝統のお菓子作りを教わりながら楽しいお茶の時間を過ごすこともありました。オーストリアの生活、文化について話をうかがい、また珍

しいことや疑問に思うことを質問ばかりしていた私に丁寧にやさしく教えてくださいました。私も日本で特訓してどうにか巻けるようになった太巻き寿司とおいなりさんを作り食べていただくことができました。普段は夕食を召し上がらないホストファザーも試食してくださりとても楽しい調理実習でした。

私はこのホームステイの間、心のこもった「おもてなしの心」をいつも感じていました。レストランで注文して飲んでいたトマトジュースが次の日の朝食に出てきたこともありました。私が「猫舌」で熱い食べ物が苦手であることを説明すると、オーストリア人は皆熱いものを飲まないからそういう意味の単語はないと笑って、次の日からは先に私用の紅茶を入れておいてくださいました。キャンプで家を空けていたホストシスターがお別れ会の日、1時間半も自転車をこいで戻ってきてくれたことも感激しました。ドイツ語のみを話されるホストファザーとは直接会話することはできませんでしたが、日本語版のウィーン解説本をたくさんくださいました。帰国後にその本を読んでみるとこの2週間に連れて行っていただいた名所、街並み公園などほとんどが紹介されていました。

今回、私は歴史あるオーストリアの音楽のみでない多種にわたるすばらしさを教えていただき、体感することができました。次回は私が生まれる前にウィーン、ザルツブルグを訪れたことがある両親を私が案内したいと思います。

最後になりましたが、今年この企画に参加させていただけたことに心から感謝しています。この感動をひとりでも多くの方々に知っていただきたいと思いました。ありがとうございました。



# オーストリア研修を終えて

波多野 未佳

まず、この研修を支えてくださった全ての方に大変感謝しています。この研修に参加できたことは、私にとって非常に大きなものだったと思っています。決して英語を流暢に話せるわけでもなく、ましてやドイツ語なんて聞いたことも無かった私は、最初そのことが不安で不安で仕方ありませんでした。初めての海外だったこともあり、私は行く前、海外を宇宙のように思っていました。そしてオーストリアに到着して空港のゲートの外で待っているホストファミリー達が見えた時、私は期待と不



安と緊張で胸がいっぱいになり、少し立ち止まって気持ちを落ち着かせたのを覚えています。ドイツ語のあいさつを何週間も前から練習していたにも関わらず、いざその時になって出てきた言葉は、「Hallo.」だけでした。私のホストシスターとママは「Hallo.」と笑顔で言って、私にヒマワリの花をそれぞれ1本ずつ手渡してくれました。私はそのことが本当に嬉しくて、ヒマワリを枯らさないように、車で移動してい



る時もずっと花を下に向けて持っていました。

空港からドナウタワーに行った後、いよいよホームステイ先の家にそれぞれが向かいました。海外は家の中に土足で入ると思っていたのですが、オーストリアは玄関で靴を脱ぎ、普段は裸足で家の中を歩いていました。私は行く前、最初はやはり文化の違いに驚くのだろうと思っていたのですが、意外にも最初は「日本と同じだ!」という驚きでした。他にも生活の中で日本と同じ所はいくつもあって、それを知るたびにだんだんと『海外は宇宙』という感覚は無くなっていきました。

私は毎日ホストファミリーに色々な場所に連れて行ってもらい、色々な食べ物を食べさせてもらいました。ヨーロッパの街並みはとてもキレイで、歴史的建造物が現代的な建物と融合している様子





がとても興味深かったです。日本のように車は多くは走っておらず、東京には無いフィアカー（馬車）や、路面電車を多く見かけました。最初はあるに普通に馬が道路を走っているなんて思ってもみなかったのが非常に驚きましたが、これがウィーンの街をきれいに見せているのだなぁと感じました。

また、オーストリア料理はとてもおいしくて、食べられなかった物はひとつもありませんでした。私がウィーンのガイドブックなどを見て、食べてみたいと思った物を書いた紙をママに見せたら、それを2週間のうちにほとんど全部作ってくれました。私のホストファミリーは、いつでも私が満足できるように、楽しめるように配慮してくれていました。

ママは英語があまり話せなかったのがほとんどホストシスターを通して会話していましたが、夜ホストシスターがシャワーを浴びている間、いつも家の周りに見えるものや家族のことなどを一生懸命説明してくれました。私も流暢に英語を話すことができないので、いつも二人で必死に身振り手振りを加えながら会話をしていました。ママと同じように、夜はホストシスターと自分の周りのことや、



日本とオーストリアのことをいつも夜遅くまで話していました。その時に、その日お互いが教えあった日本語とドイツ語をお互いのノートに書き合いました。そんなことをして

いるといつも時間は夜中の1時や2時になっていて、「時間が足りない!!」と言いながらベットに行っていたのを覚えています。色々な場所に行き、色々な物を見てきましたが、私にとってその夜の時間は何よりも楽しくて何よりも貴重な時間でした。

日が経つに連れ、私はホストシスターにどんどんと本当のお姉さんのように接するようになっていきました。そしてホストシスターも、私のことを「みかは私の妹!!」と言ってかわいがってくれました。そう言ってもらった時には、涙が出そうになるくらい嬉しかったです。最初は言葉が通じないことをとても気にしていましたが、そんなのは全然関係なくて、一緒に生活をして一緒に何かをすることで、文化や言語が全く違っていたって家族のようになれるのです。帰る日の前日は、家の庭にあるブランコに座っ



て、ホストシスターと夜中の2時か3時くらいまで話していました。日本に来た時に会う約束をして、私はまたオーストリアに戻ってくる約束をしました。たったの2週間でしたが、私は今でもホストシスターを本当のお姉ちゃんのように思っているし、オーストリアのママやパパやお兄ちゃんを本当の家族のように思っています。

最後の日は、そう思っていたからこそ本当に寂しくて、泣かないようにしようと思っていたのに空港で涙が溢れてきてしまいました。空港にはママとホストシスターが来てくれたのですが、しっかりしていていつも面倒を見てくれたホストシスターも、強くて明るいママも、その時にはぼろぼろと涙をこぼしていました。その時は、今までに経験したことがない程感動した瞬間でした。とても嬉しかったです。



私は、この研修でオーストリアが大好きになりました。もちろん街や文化も素敵ですが、何よりもオーストリアで巡り合った人たちが皆良い人ばかりだったからです。そしてもっと世界の色々な場所に行って、様々な人に巡り合いたいと思うようになりました。世界の見方は、私の中で明らかに変わりました。それは、この研修のおかげだと思います。この研修を今まで支えてくださった葛飾区の方、フロリズドルフ区の方に心から感謝しています。そして、もちろん一緒に行った4人の派遣団員の皆にも感謝しています。この研修に参加することができて本当に良かったです。これを機に、私はいつかドイツ語を話せるようになってまたオーストリアに戻り、この研修で出会った人達とドイツ語でもっとたくさんのお話を話したいと思っています。

## Das Leben in Österreich

### —19歳女子大生の場合—

小林 順子

#### 1. はじめに

私が「ウィーン市フロリズドルフ区青少年ホームステイ派遣」に参加した動機は3つありました。1つは、あちらの私と同じ10代の若者が、「将来について何を考え、今何が好きで、どんな生活を送っているか」を知りたいと思ったこと。2つ、オーストリアは音楽家だけでなく、多くの科学者も輩出されています。私は工学系の大学に通っていて、将来も研

究職に就きたいと思っているので、今日の科学に繋がる研究をしてきた人の歴史に触れた  
いと思ったこと。3つめに、文化も習慣も違う土地で生活を共にし、見識を広げ、自分のバ  
ックボーンを確立し、コミュニケーション能力を培うこと。以上の3点でした。

ウィーンには教会や美術館巡りよりも、ホストファミリーを始めウィーンの人と共に過  
ごせる時間を何よりも大切にすると決め、出発しました。

## 2-1. ホストファミリー及び出会った人について

私のホストファミリーになってくださったのはクリスティーネ・コッホさんという方  
です。家はフロリズドルフ区役所に近い(日本で言う)マンションでした。そこでは、クリス  
ティーネさんと、孫のアナさんと私の3人で生活しました。アナさんは私と同年で、2009  
年の夏に日本にホームステイで来ていた子でした。クリスティーネさんはとても優しい方  
でした。「英語を少し忘れてしまった」と言っていました。むしろ英語が苦手な私にとっ  
ては分かりやすかったです。オーストリアでは世代によって英語ができるできないに差が  
ありました。

2週間の滞在の内、アナさんのお父さんゲラル  
ドさんのお家にもお世話になりました。

また、クリスティーネさんのボーイフレンド  
やその(おそらく)お姉さんやアナさんの家族、  
親戚の方々にも会うことができました。



▲ゲラルドさん、エクセルさんと

## 2-2. 特にアナさんと私について

前でも書いた通りアナさんと私は同年です。絵や刺繍が好きでとてもクリエイティブ  
な子です。私はこの4月に大学へ通い始め、アナさんは9月から始まります。クリスティー  
ネさんがでかけられない時や忙しい時はアナさんと一緒に行動しました。ただ、アナさん  
も友達と2人暮らしを始めるので引越しがあり、とても大変そうでした。

日本から私は浴衣一式をお土産に持って行きプレゼントしたところ、とても喜んでくれ  
ました。私自身もオーストリアの民族衣装に興味があったので、買いたいと言っていたら  
アナさんが着られなくなってしまったものをくれました。思いがけないプレゼントでとて  
も嬉しかったです。

アナさんと行動し、話し、少し夜更かしして感じたことは、日本の10代とあまり変わら  
ないという事です。ケータイのポイントが貯まって喜び、気になる男の子がいたり(悲しい  
かな今のところ私にはいませんが)、家の鍵を忘れたり、パソコンが好きだったり…。この  
滞在の中で私はアナさんと一緒にいた時間に1番笑っていたと思います。これまでの私は  
かなり失礼な話ですが、「外国人=別世界の人」というイメージを持っていました。しかし  
短い間ですが生活を共にし、私の19年纏わり付いていた妙なイメージを拭うことができま

した。私にとってこれは大きな収穫となりました。

### 3. ウィーン滞在内容

**7月26日** オーストリア到着。その後、ドナウタワーに登る。ここのバンジージャンプ台は割りと恐怖。近くのお店で桃とヨーグルトのケーキを食べる。この店のトイレトーパーの大きさに驚いた。

**7月27日** スペイン乗馬学校でショーの観覧。写真を綺麗に撮影するのが難しい。市庁舎に行く途中寄った庭園には薔薇がよく咲いていた。そこでガムを踏んでショックだった。市庁舎では普通の観光では入れない会議室に入る事ができた。市議会第三議長のフーフナグルさんの握手が力強かったのが印象に残っている。

市庁舎を見学の後、一度解散したが日本人のメンバーとオーストリアの若い子で街にでた。ウィーン大学も少し見学できた。そこでは、私が大学で習ったばかりの科学者の像を見つけた。ほかにも知っている名前の像をいくつか見つけた。興奮した。

**7月28日** クリスティーネさんとそのボーイフレンドのグンターさんとそのお姉さんと Burgenland のアイゼンシュタットに行った。ハイドン縁の地らしい。途中グンターさんの知り合いの家にお邪魔した。表は床屋になっており奥に居間がある素敵な家だった。美味しいケーキと紅茶を頂いた。オーストリアの家はどこも綺麗に整えられて、ケーキがあるように思われる。とても羨ましい。その後ハイドン教会を探険(アスレチックみたいで面白い)。昼食にウィーナーシュニッツェルを食べた。私には大き過ぎたので半分にしてもらった。帰りに寄った湖では沢山の自転車の旅行者が船で湖を渡っていった。

**7月30日** 午前中はウィーンの街で買物をした。夕方からコンサートへ行く。会場はお正月に NHK で放送されているコンサートも開かれる有名な所だ。とても心地良い響きだったが、コンサート終了後は速やかに会場をでた方が良い。係員が怖い。

**7月31日** ゲラルドさんとその奥さんのエクセルさんと Melk(杏が有名らしい)に行った。そのメルク修道院の図書室が面白かった。古い天文学や医学の古書が展示されている。この修道院の庭はとても美しいが、かなり哲学的だったのでフィーリングでカバーした。

**8月1日** 午前中はゲラルドさんの家で読書をした。ドイツ語は分からないが面白い絵本や図鑑を数冊楽しんだ。その中でオーストリアと比較すると遥に日本の地震の頻度が多いことを再認した。午後からはアナさんの実家にいった。庭にプールがあったのでアナさんとアナさんのお母さんと遊んだ。アナさんの弟さんお祖母さんとお爺さんにも会えた。

**8月2日** フロリズドルフ区の区庁舎訪問。私の父も約20年前にお囃子の会の関係でウィーンに訪れ、兄もホームステイでお世話になり、今回私も行くことができたので感謝を込めて父の彫ったお神楽の面(おかめ)を贈ることができた。その

▼区長さんと



後、ホテルザッハー(ウェイトレスのユニフォームが可愛い。)に行きザッハートルテを堪能。シシー博物館の見学。

**8月3日** ザルツブルグ観光。おそらくオーストリアで1番早い電車に乗って行くが、新幹線を見ている私にとって、若干のものたりなさを感じた。しかし、車窓の風景はこちらの方が良い。モーツァルト博物館の下にアイス屋さんがあるがとても安いのでお勧め。

**8月4日** この日は私の兄がお世話になったハマーシュミット家を尋ねた。ハマーシュミット家のお母さんと囲碁やボードゲームを楽しんだ。庭で採れたイチジクを頂いた。

夕方からはプラーターという遊園地の様な所でアナさんやほかの子達と遊んだ。観覧車で有名。

**8月5日** アナさんとシェーンブルン宮殿へ行く。そこの動物園は楽しかった。が、上野動物園に比べ入場料が高い。アナさんも「クレイジーだ」と言っていた。その後、クリスティーネさんの娘さんの家に行く。娘さんが入院しているので、クリスティーネさんが孫のお世話をしているからだ。次男がチョロチョロよく遊んでいた。

**8月6日** 夕方からフェアウェルパーティーがホイリゲで行われた。私は幼い頃からお神楽を習っていたので両面という演目を披露した。ホストファミリーの皆さんなど仲間内に見せるだけだと思っていたが、ホイリゲに来ていた普通のお客さん達の前で披露することになった。私としても多くの人に見て、楽しんでもらえたので、とても嬉しい。夜はゲラルドさんの家に泊まる。アイスを皆で食べた。レモンが Lecker! ゲラルドさんが大丈夫なのかと言うほどアイスを食べていた。

**8月7日** アナさんがアナさんのお母さんのボーイフレンドの娘さんと旅行に行くので空港までゲラルドさんとお見送りに行く。家に帰ってから、ゲラルドさんとエクセルさんとボードゲームをした。オーストリアやドイツではボードゲームなどのテーブルゲームが発達しており多種多様にある。私の兄がまたこれらを集めるのが好きなので私も興味があった。実際皆でテーブルを囲んでゲームをするのは歳が離れていても何の隔たりも無くプレイできるので、日本の美しい画像のゲームも私は好きだけどテーブルゲームももう少し見直すべきだと思った。

**8月8日** オーストリア出発の日。トランクが重量オーバーで焦った。けど、何とかなった。お土産のスノーボールが手荷物の中に入っていて取られるかと思ったけど大丈夫だった。ただ、ジャムはアウトなので気をつけた方が良い。

▼アナさん、私、クリスティーネさん、グンターさん(ホイリゲで)

#### 4. 最後に

このホームステイでオーストリアの生活と文化、なにより懐の深さに感銘を受け、個々の人がとても自分の時間を生きていると感じました。アナさんの家族関係は少し複雑かつ多忙だったので日本



の家庭だったらホームステイの受け入れは難しいと思います。しかし、私が出会った人は英語が分からないだろうが何だろうが、とても暖かく接してくれました。とても嬉しかったです。また、同じ年代の子と時間を共有することで違う国の人に対する考えがかわりました。

行く前に思い描いていた目標は達成出来たと思います。ただ、もっと英語ができたらより得るものが多かったでしょう。今回の出会いを活かしこれからの関係のためにもっと勉強しようと思います。

幼い頃より日本文化に触れる機会は他の人より多い環境に育ったので、日本から初めて海外へ出て外から見ることで、私の中で日本の良さ・文化と日本で生活している私という人物をハッキリとらえることができました。今回の滞在で得たものを忘れずに、あらゆる人と相互理解するための力としたいです。

ウィーン市フロリズドルフ区青少年派遣団員

小林順子

2010年9月11日

## フロリズドルフ区派遣報告書

団長 山下 葉月



↑最終日バディと空港にて



↑表敬訪問の際、団員とレーナー—区長と記念撮影

今夏、ホームステイプログラムに参加をし、様々な経験をした。たった 2 週間の滞在であったが、研修のまとめとして、国際交流について論じようと思う。

### 国に馴染むとは？

フロリズドルフ区へ表敬訪問に行った際、レーナー区長は次のようにおっしゃった。

「相手の国に馴染む、とは文化を学ぶことである。」と。

なぜ、彼がこのような意識を持ったのか。それは、今オーストリアでは外国人移住問題が最も重要なテーマだからだ。とりわけトルコからくる人々には深刻であり、彼らはウィーンに来て、たくさんの子供を産む。平均で、1 家庭につき、6~8 人の子供がいて、実際に現地でもそのような家族連れを多く見た。

わざわざ少し離れたオーストリアを訪れるのは、国から支給される子供手当のためである。オーストリアでは 26 歳以下の方が一人につき月 2 万円相当貰えるからだ。6 人いれば、12 万円になる。多額の援助が得られ、トルコにいた時よりもはるかに良い暮らしができる。実際に少子化も起きているので、人口が少ないと国のシステムそのものが成立しない状況におこまれているため、外国の方もとりこんでしまおう、という動きがあり、彼らの子供たちにも快適な環境を作っていこうとしているのだ。

オーストリアとしては、トルコの方がくることは拒んでおらず、むしろ来てほしい、と思っている心境である。では何が問題なのか。それは、彼らが一向に国に馴染もうとしないことだ。現地ではトルコ語のみを使って無理に融通を効かそうとしたり、聖シュテファン寺院に一度も訪れたことがなく、歴史を学ぼうとしない。長く住んでいるにも関わらず、文化を全く理解していない人が多数いるそうだ。そんな状況をふまえたのか、オーストリア人の皮肉の中にこのようなものがある。「ウィーンはもうすぐ第 2 のトルコになる。」2 度にわたるオスマン帝国のウィーン包囲を退けたオーストリアだったが、今度は回避できないだろう、というニュアンスがこめられているのだ。

### 偏見をとりのぞく

「けれど、すべてのトルコ人がそうじゃない。中にはオーストリア文化をきちんと学んでいる人もいる。」と思う人がいるかもしれないが、まさしくその通りだ。しかし、人々の中に、「トルコはオーストリアを学ばない、なじもうとしない国」というイメージができあがってしまっている。この状況をここでは「偏見」とよぶことにする。

話は少し変わり、私が滞在した時の逸話の紹介をする。私は 2 週間の間、出会う人々に対して日本のイメージを聞いてきた。彼らは笑顔で答えてくれる、「ああ、私は日本についてよく知っているよ。フジヤマ、ゲイシャ、そしてスシだね。日本は素敵だよ。」

旅行中にこれらのことを感じたのならそれはそれで構わない。しかし、実際の私たちの生活に、富士山や芸者は関係あるだろうか？

もうひとつ、こんな経験をした。ある日、私はホストバディのパトリックと共に、DVD ショップへ出かけた。その店は、あらゆる国から DVD が輸入され、国別に売られている。私は迷わず先に日本のブースへと足を運んだが、そこに並んであった DVD は 2 つだけで、

しかも「ロボゲイシャ」と「ラストサムライ」だけであった。日本は、この映画しかやっていないわけではないはずだ。これは日本に対する一般的なイメージ「偏見」ではないだろうか？この「偏見」は、厄介なことにあらゆる国に存在する。私もパトリックにオーストリアのイメージを聞かれた。私も当初は、「音楽の都、芸術の国、伝統的な町並み…」彼は真顔で「僕は音楽もダンスもできないし、絵も描けないよ。」

以上のような話から、この「偏見」をとりのぞくことで、私たちは真に互いを理解できるのではないだろうか。

### **国際交流で大切なこと**

国際交流において大切なこと。それは何よりも偏見の削除であるだろう。そして、それに加え、自分の文化を押し付けるばかりでなく、他国の文化を知った上で、私たちの文化も紹介するから聞いてほしい、といったような譲り合いの気持ちも重要になってくる。

この2週間を通じ、私とパトリックの中にある「偏見」は少し取り除けたように思う。そして、さらに「相手のことを知りたい」と思うようになった。

「姉妹都市間において、馴染むとは他国の文化を学ぶことである。川と下町という共通点を踏まえ今後とも馴染み、良好な関係を続けていきたい。」

レーナー区長は、表敬訪問をこの言葉で締めくくった。フロリズドルフ区と葛飾区との交流は20年以上に及ぶ。既にかかなりの長さに達しているが、今後ともこのような友好な関係が続き、互いの国が馴染みあうような関係を続けていければいいと考える。